提出日：平成 22年2月10日

イギリスにおける情報教育の現状調査

牧野友紀（東北大学大学院情報科学研究科　助教）

調査・場所
１．ダービー日本人補習学校 ２．テルフォード日本人補習学校 ３．British Museum ４．Kelvingrove Art Gallery and Museum ５．Kirkcaldy Museum and Art Gallery ６．Bank of England Museum
日程
2009 年 3 月 16 日～2009 年 3 月 23 日
参加者
牧野友紀(助教)
目的
本調査は、１）日本人補習学校において、どのような情報教育が行われているのか、現状を視察し、関係者にインタビューを行うことを第一の目的とする。在外の教育施設のうち、イギリスには、私立在外教育施設、日本人学校、日本人補習学校が存する。そのうち、日本人補習学校は、現地校に通う子どもに対して、国語や算数を中心とした授業の補習を行うことを中心としている。週末だけの補習授業のみに特化した学校において、情報教育がいかに行われているのかを探る。２）イギリスの博物館は、教育施設として明確に位置づけられており、学校教育に対するインフォーマルな教育の場として用いられている。情報機器を活用した展示等がどのように行われているのか。博物館が果たしうる教育機能を探り、情報化がいかに進められているのかを調査することが目的である。
概要および成果
［日本人補習学校に関する調査］ イギリスのミッドランド地方に位置するテルフォード日本人補習授業校、ダービー日本人補習校の 2 校を訪問し、小野寺結（前）校長、田中浩一校長、関係者の方にインタビューを行った。オフィス、事務室は共に現地の学校施設（The Lord Sikin School、Derby College）内に置かれ、土曜日に教室を借用して授業を行っている。両校は、現地校に通う小中高生に対して、国語や算数（数学）を中心とした授業の補習を行っている。 お話をお伺いする中で、特に印象的だったことは、先生方を始め、保護者の方々、関係者の方々が、日本の学習環境に近づけるべく多大な努力されているということである。その代表例は、学校行事である。両校とも、授業数が少ない中で、日本で行われているものと等しく、入学式、卒業式を始め、遠足、運動会、修学旅行、書き初め会などを実施している。写真１は、このような日本独自の行事が、

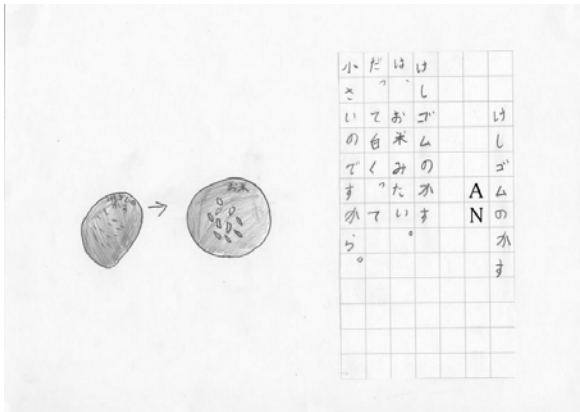
現地校との交流の機会ともなっていることを示すものである。The Lord Sikin School では、テルフォード日本人補習授業校の書き初め会に参加した児童の様子、作品を展示している。

英国と日本という二つの文化の下で学び生活する児童・生徒は、時に、ルールや慣習の違いにとまどい、困惑したりすることがしばしばある。両補習校では、このような多文化状況でこそ感じる心の体験を掬い上げるべく、作文教育や作品集作りに力を入れている（写真２）。

また、情報機器の活用についてであるが、ダービー補習校では、生徒が利用できるパソコンが四台設置されている（写真３）。それらは、調べ学習や、提出物の作成（パソコンで書き、プリントアウトして提出）に利用されている。また、両校は共にホームページを有しており、学校、教育の様子について詳細な情報を掲載している。この点についても、貴重なお話を伺うことができた。

今回の訪問を通して、１つの空間に二つの教育文化が併存することの意味、意義というのを強く感じた。なによりも、二つの教育文化を学ぶ児童・生徒が、ユニバーサルに通用する生活リテラシーを自ら身につけているということが印象的であった。このことは、校長先生を始め、教員の先生方、保護者、関係者の方々による積極的な学校づくりの結果ゆえだと思われる。

（写真１）



（写真２）ダービー日本人補習校ホームページより転載

http://www.derbyjs.co.uk/index.php?option=com_content&task=view&id=52&Itemid=65

（写真３）

［博物館教育に関する調査］

博物館教育に関する調査では、4 つのタイプ（①世界的な博物館、②国 country を代表する博物館、③地域を代表する博物館、④特定事物を扱う博物館）の博物館を訪問し、その展示の特徴について調査した。まず、第一のタイプは、世界的な博物館である大英博物館（British Museum）である。この博物館は、国家機関に準じ、大英博物館法、博物館・美術館法に基づき、委員会による運営形態をとっている。大英博物館では、Education of Department があり数十名のスタッフを配備させて、学校教育、家庭教育、生涯教育に向けに、ワークショップ、教材の提供など様々なサービスを提供している。また、子ども向けのミュージアムショップも独立に備えている。大英博物館のホームページには、子ども・若者向けのページ（http://www.britishmuseum.org/explore/young_explorers1.aspx）があり、ここで所蔵品データベースの検索や、学習ゲームなどをおこなうことができる。当該博物館は、展示物が多岐にわたり、実際に見学するには相当の時間を有する。したがって、インターネットを用いての事前・事後学習は、博物展示を理解するうえで極めて有効であるように考えられる。

第二のタイプは、スコットランドを代表する博物館、Kelvingrove Art Gallery and Museum である。スコットランドの第二の都市、グラスゴウに位置し、2006 年にオープンして 500 万人以上の入場者数を超え、博物展示に関し、数多くの賞を受賞している。本博物館で特徴的なことは、従来博物展示が難しいとされている「社会問題」を様々な装置を用いて展示しているということである。たとえば、スコットランドに流入する移民の問題について、データ等を示すだけでなく、かれらのアイデンティティを表す持ち物を展示したり、移民自身の体験を、ヘッドフォンで、当事者の「語り」として聴かせるというコーナーを設けたりしている（写真４、５）。

（写真４）　　（写真５）

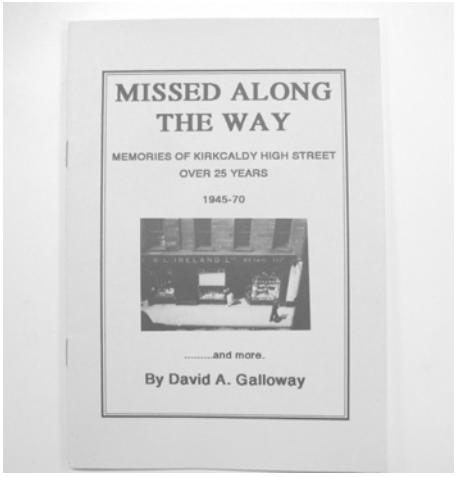
また、家庭内 DV に関して、どういった暴力がなされるのか、その際、なにが道具として用いられるのか、そうした想像を見学者に喚起させる為に、写真６、７のような展示をおこなっている。

（写真６）　　（写真７）

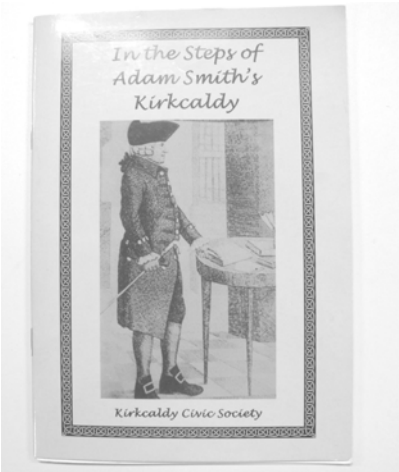
全般的に、展示物の鑑賞だけでなく「体験」の視点を取り入れ、大人と子どもが同時に見学できるような工夫がなされている（写真８）。

（写真８）

第三のタイプは、スコットランド・ファイフ行政区にある、Kirkcaldy Museum and Art Gallery である。カーコルディは、スコットランドの中心都市エジンバラから列車で 50 分ほど離れた小さな町であり、当該博物館は、カーコルディ駅に隣接し、いわば町の博物館といった趣を呈している。運営主体は、Fife council community service である。当該博物館は、展示としては、オーソドックスな手法を用いているが、世界的な経済学者アダム・スミスの出身地であるため、彼の遺品の展示が目玉となっている。そうした博物展示に加え、この町では、Kirkcaldy civic society というボランティアグループが、町の歴史、文化、社会等に関する情報を小さな冊子について出版している。いわばイギリス版「地元学」の実践といえそうである（写真９、１０）。とりわけ、アダム・スミスに関する冊子は、スミス研究の観点からみて極めて重要な資料であると思われる。
子ども向けの地元教材は現在出版されてはいないが、今後、期待される。



（写真９）



（写真１０）

第四のタイプが、ロンドンにある Bank of England Museum であり、特定の事物に焦点を絞った博物館である。本博物館は、建造物が当時のものであり、それ自体が博物展示の対象である。また、銀行発祥の地であることから、本博物館は「シティ」についての博物展示という機能をも有している。展示の特徴としては、経済の基礎用語を体験型の展示や、コンピューターゲーム、ボードゲームを用いて理解させるコーナーが展示の目玉となっており、子どもの学習にとって適切な展示がなされている。

その他、実物展示ができないものを補完・代替するものとして、ビデオ、コンピューターを何台か配置させ、有効に活用されていた。なお、本調査が、市内の小中学校の社会見学とぶつかり、その様子をうかがうことができた。生徒は各々好きな展示を見て回りながら、ガイドの説明を受け、チェックシートに記入するというやり方をとっていた。

以上、イギリスの情報教育の現状に関する調査をおこない、在外教育施設における情報教育、博物館教育の実際を理解することができた。イギリスにおける情報教育のあり方は、日本にとっては、いわば先進事例といってよい。今後は、日本の現状・特質を踏まえながら、いかにして摂取していくか、が重要かつ課題であるように思われる。